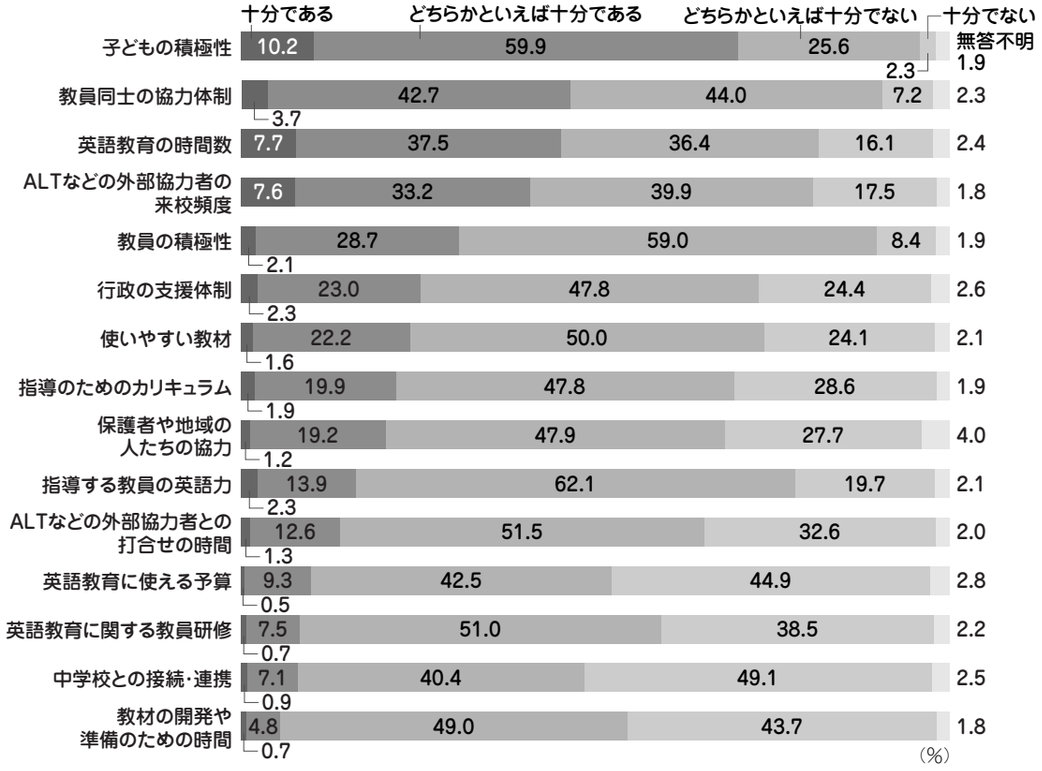
# 1. 英語教育の現状

7割の教員が、英語教育に対する「子どもの積極性」は十分と回答。しかし、それ以外の項目では十分という回答は半数を下回る。また、英語教育の年間時数が多い場合のほうが、条件は整っている。

**Q** 英語教育を行ううえで必要となる条件などについて、貴校の状況は十分だと思いますか。

## 図1-4-1　英語教育の現状




＊英語教育を「行っている」学校（3,292人）のみ対象。

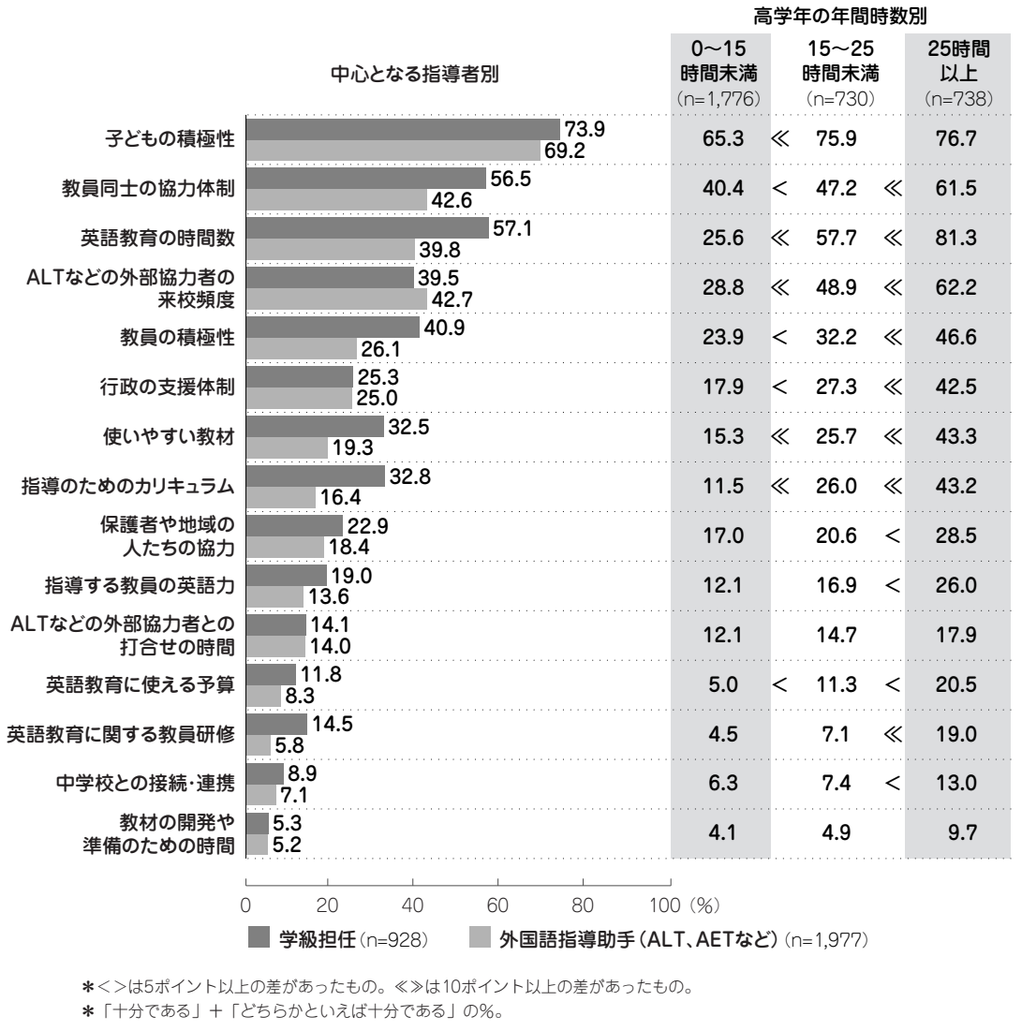
すでにみたように、現在、多くの小学校では何らかの形で英語教育が実施されている（図1-1-1）。では、英語教育を実施するうえで必要となる諸条件は整っているだろうか。「人（指導者）」「物（カリキュラム、教材など）」「予算」といった資源を中心に、十分であるかどうかをたずねた。

**図1-4-1**によると、「十分である」と「どちらかといえば十分である」の合計で、半数を超えたのは、「子どもの積極性」（70.1%）のみである。「教員同士の協力体制」「英語教育の時間数」「ALTなどの外部協力者の来校頻度」が4割台で続く。

一方、「教材の開発や準備のための時間」が5.5%でもっとも少ない。さらに、「中学校との接続・連携」は、小学校だけではなく、今後の英語教育全体を考えていくうえでも重要な観点と考えられるが、十分という回答はわずか8.0%にとどまる。また、「英語教育に関する教員研修」「英語教育に使える予算」も１割に満たない。全体として、英語教育を実施するうえでの条件は、まだまだ十分に整っているとはいえないようだ。



## 図1-4-2　英語教育の現状（中心となる指導者別／高学年の年間時数別）




＊＜＞は5ポイント以上の差があったもの。≪≫は10ポイント以上の差があったもの。
＊「十分である」＋「どちらかといえば十分である」の%。

**図1-4-2**は、英語教育を行ううえで必要となる諸条件が十分であるかどうかを、指導者や年間時数といった、英語教育の実情に応じて詳しくみたものである。

まず、実際の授業で中心となる指導者別にみると、ほとんどの項目で、「学級担任」が中心の場合のほうが、「外国語指導助手（ALT、AETなど）」が中心の場合よりも、十分という回答が多い。なかでも、「教員同士の協力体制」「英語教育の時間数」「教員の積極性」「使いやすい教材」「指導のためのカリキュラム」といった項目で差が大きい。

次に、高学年の年間時数別でみると、時数が多いほど、十分という回答が多くなっている。「英語教育の時間数」で差がみられることは当然としても、「ALTなどの外部協力者の来校頻度」「使いやすい教材」「指導のためのカリキュラム」などの項目で差が大きい。

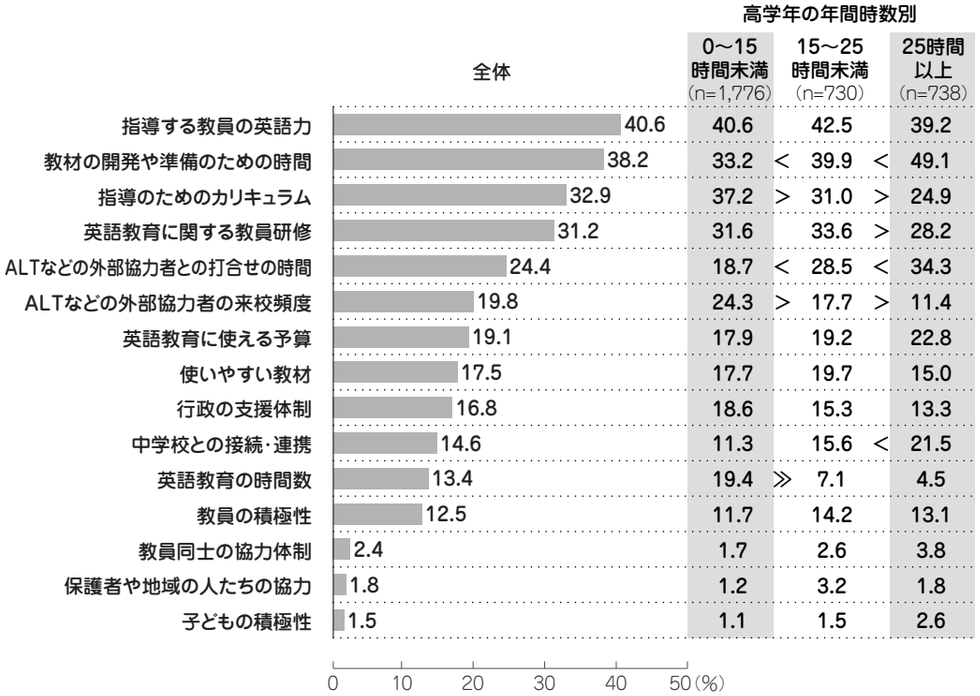
ほとんどすべての学校において、何らかの形で英語教育が行われているとはいえ、中心となる指導者や年間時数といった実情によって、条件整備の現状には大きな差がある。それぞれの学校の実情に応じた優先順位をつけて、環境を整えていく必要があるだろう。

# 2.英語教育の課題

「指導する教員の英語力」「教材の開発や準備のための時間」を課題にあげる教員が多い。また、英語教育の年間時数によって課題には違いがあり、時数が多い場合には、英語教育の実施上の課題が多く、時数が少ない場合には、英語教育実施以前の課題が多いようである。

**Q** とくに課題だと感じていることは何ですか。貴校で課題として感じることを３つまで選んでください。

## 図1-4-3　英語教育の課題（全体／高学年の年間時数別）




＊15項目の中から３つまで選択。
＊＜＞は５ポイント以上の差があったもの。≪≫は10ポイント以上の差があったもの。
＊英語教育を「行っている」学校（3,292人）のみ対象。

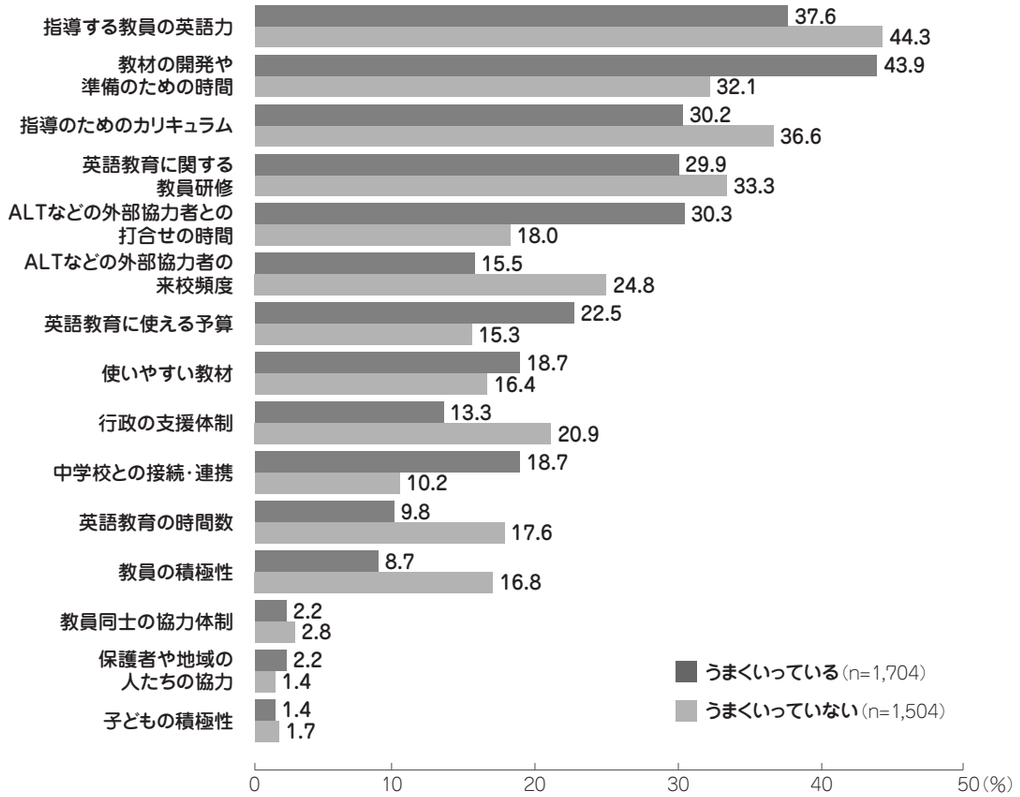
**図1-4-3**では、英語教育を行ううえでの課題について、前頁の15項目の中から3つまで選択してもらった。全体では約4割が「指導する教員の英語力」「教材の開発や準備のための時間」を、約3割が「指導のためのカリキュラム」「英語教育に関する教員研修」をあげている。

さらに、高学年の年間時数別にみたところ、英語教育をどのくらい行っているかによって、認識される課題は異なっていることがわかった。すなわち、時数が多い場合には、「教材の開発や準備のための時間」「ALTなどの外部協力者との打合せの時間」「中学校との接続･連携」といった、英語教育の実施上の課題が多く認識される傾向にある。

反対に、時数が少ない場合には、「指導のためのカリキュラム」「英語教育に関する教員研修」「ALTなどの外部協力者の来校頻度」「英語教育の時間数」など、そもそも英語教育実施以前の課題が多く認識される傾向にあるといえるだろう。



## 図1-4-4　英語教育の課題（英語教育に対する評価別）




＊15項目の中から３つまで選択。
＊「うまくいっている」は「総合的にみて、貴校の英語教育はうまくいっていると思いますか」の設問で、「とてもうまくいっている」「まあうまくいっている」と回答した場合。「うまくいっていない」は「あまりうまくいっていない」「まったくうまくいっていない」と回答した場合。

図1-4-3では、英語教育の年間時数という客観的な観点から認識される課題の違いをみた。ここでは次頁の英語教育に対する評価（図1-4-5）という、いわば主観的な観点から、課題と認識される内容の違いをみてみたい。

**図1-4-4**をみると「教材の開発や準備のための時間」「ALTなどの外部協力者との打合せの時間」「英語教育に使える予算」「中学校との接続･連携」といった項目を課題としてあげる割合は、英語教育が「うまくいっている（とても＋まあ、以下同様）」と回答した層のほうが、「うまくいっていない（あまり＋まったく、以下同様）」と回答した層よりも、5ポイント以上高い。

他方、「指導する教員の英語力」「指導のためのカリキュラム」「ALTなどの外部協力者の来校頻度」「行政の支援体制」「英語教育の時間数」「教員の積極性」を課題としてあげる割合は、「うまくいっていない」と回答した層のほうが、「うまくいっている」と回答した層よりも、5ポイント以上高い。つまり、英語教育が「うまくいっている」場合は、前頁の年間時数が多い場合と同様に英語教育の実施上の課題をあげる傾向にあり、逆に、「うまくいっていない」場合は、実施以前の前提条件を課題としてあげる傾向にある。

このように、英語教育がうまくいっているかどうかという主観的な評価との関連をみても、その評価によって認識される課題には違いがみられる。

# 3. 総合評価

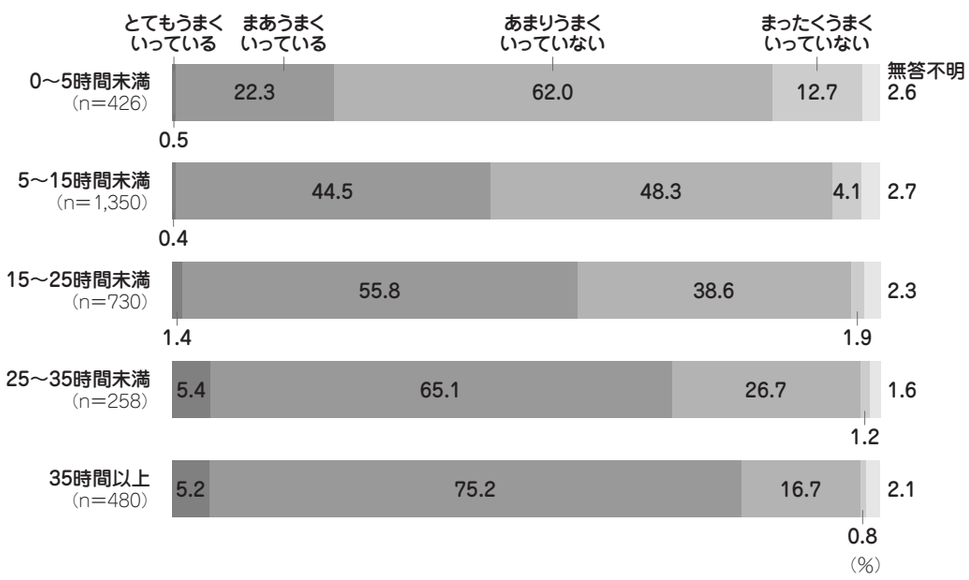
**英語教育がうまくいっているかどうかの評価については、ほぼ半数ずつで拮抗している。また、年間時数が多い学校ほど、「うまくいっている」との回答は多い。**

**Q** 総合的にみて、貴校の英語教育はうまくいっていると思いますか。

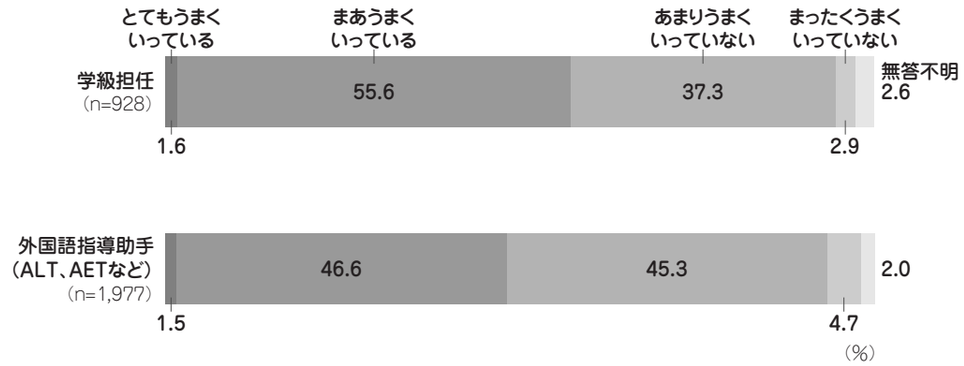
## 図1-4-5　英語教育に対する評価

＊英語教育を「行っている」学校（3,292人）のみ対象。

## 図1-4-6　英語教育に対する評価（高学年の年間時数別）




## 図1-4-7　英語教育に対する評価（中心となる指導者別）




総合的にみて、実施している英語教育がうまくいっていると思うかどうかをたずねたところ、「うまくいっている（とても＋まあ、以下同様）」という回答が51.8%、「うまくいっていない（あまり＋まったく）」という回答が45.7%と、ほぼ半数ずつで拮抗している**（図1-4-5）**。

さらに、高学年の年間時数別に総合評価の違いをみたところ、「0～5時間未満」の学校では、「うまくいっている」という回答は22.8%だが、「35時間以上」の学校では80.4%と、大差がみられる**（図1-4-6）**。

また、中心となる指導者別にも違いをみたところ、「学級担任」が中心の学校では「うまくいっている」という回答は57.2%だが、「外国語指導助手（ALT、AETなど）」が中心の学校では48.1%と、「学級担任」が中心の学校のほうが「うまくいっている」という回答はやや多い**（図1-4-7）**。

ただし、年間時数の多さや学級担任中心の指導が、英語教育への総合的な評価の高さに単純に結びつくわけではないことに注意が必要である。というのも、「英語教育の現状」（図1-4-2）で示したように、年間時数が多い学校や、学級担任を中心に英語教育を行うことができる学校のほうが、相対的にみれば、さまざまな条件自体が整っていると考えられるからである。しかしその一方で、多くの時間を使って英語教育を行ったり、学級担任が中心に立って行ったりすること自体が、積極的な取り組みや肯定的な評価につながっていくことも考えられる。さらなる検討が必要であろう。